

生死事大、無常迅速・・・その二

平成二十五年六月十四日（金）

五泉市 永谷寺副 吉原東玄

ちようど一年前の法話会レジュメ

私達人生の最大の課題をいま一度思い知らしめる有名な言葉です。釈尊は人生を「生老病死」の四苦とらえました。こと生死の問題は最も不可思議な謎で仏教者にとって究極の命題と言えましょう。世の中の一切のものは常に移ろいゆき、しかもそれは迅速です。私達もいつ死ぬかわかりません。そのために常に怠らず精進するよう戒めています。

「時間が足りない」と焦るくせに、「時間をもてあましちやって」などと言う。思えば、しつくり過不足なく時間が流れることは、人にはまれなのかもしれない。時間を止めたい時があるかと思えば、お金を払ってでも早く過ぎてほしい時がある▼後者の典型は待つ時間だろう。それにも様々なシーンがある。ラブレターの返事を待つのと、舌打ちしながら遅延電車を待つのは違う。通勤電車の場合、10分の遅れで4人に3人がイライラを感じるそうだ▼シチズンホールディングスが、ビジネスに携わる20〜50代の男女計400人に聞いた。総合病院では45分までに過半数が、役所なら15分までに7割が「イライラゾーン」に入るようだ▼それでも10年前の調査に比べて気長になっていくという。スマホが時間つぶしに役立つているのでは。そんな推測がある一方で、ネットの接続に10秒かかるのと5割以上がじれるというから皮肉めく▼米の文豪フォークナーが「時計が止まる時、時間はよみがえる」という意味のことを述べていた。考えてみれば、私たちは時計なしの時間を知らない。時を見た人はいないのに、時計に時を見せられて、いつも小走りに急ぎがちだ▼おそらくは文豪と同じ含みで、「ちっこい機械が悠久の時間を支配すべきだろうか」と書いたのは絵本作家の故・佐野洋子さんだった。あすは時の記念日である。きょうはひとつ、ちっこい機械の文字盤を、しばし忘れてみるのもいい。できればスマホもOFFにして。

六月九日付け朝日新聞「天声人語」

ひとの生をうくるはかたく やがて死すべきものの いま生命あるはありがたし
正法を耳にするはかたく 諸仏の世に出づるもありがたし

『法句経』182番より



視点

ゆとりの心を育てよう

心遣いを積み重ねて「心の習慣」に

現代社会は忙しい生活をしている。新しいことを始めようと呼びかけても、とてもそんな時間はないという声が聞こえてくる。

生「テレビを見る時間はあるけど、子どもに手作りの料理を作る時間はない母親」「ゴルフをする時間はない妻や子ども達の話も聞かない父親」

我々は、家族や多くの人々に囲まれていながら、忙しさにまかされて「人とのかわり」が薄くなっている。それはまるで「生き急ぎ」とも言える。

我々が毎日の生活の中で、話したり行動したりという、外に現われるものの中には、必ず心の働き、つまり「心遣い」がある。これは目に見えず、相手に判らないからといって、どうしてもよいというものではない。この心遣いが積み重なって、我々の心の習慣となっていく。

例えば、不平不満の心で毎日を送る場合と感謝の心で送る場合とは、年月を経ることによって大きな違いを生じるだろう。そしてそれが、我々の人格そのものに大きく関わっていく。また、我々の生活の中には、楽しいことや嬉しいこと、有り難いことがたくさんある。しかしややもすると、そうしたことにあまり目を向けず、心配ごとや悩みごとなどに目を向けてしまいがちだ。自分自身の暗い部分より、もっと明るい部分を見出すことで、自分の気づかなかった良さも見えてくるのではないだろうか。

孫川 氏

人生を八十年として、時間に換算すると、約七十万時間。

そして、人間が生きてゆくために、眠ったり飲食したり排泄したりするための時間を1日あたり10時間とすると、そのために費やす時間は約三十万時間。

仮に40年間、休日以外は10時間働き続けたとしても、総労働時間は、約十時間。

経営コンサルタント 大山祐史(ゆうじ)氏による分析

残りの三十万時間をどう過ごすか、まさに「生死事大 無常迅速 各宜醒覚 慎勿放逸」であります。合掌